

日本リハビリテーション工学協会
世話人代表 末田 統
市川 洸

リハビリテーション工学に関心をもっておられる人が我が国にいったいどのくらいいるのか明らかではありませんが、約40人に一人と言われる我が国の障害者数をみても、かなりの数にのぼることは間違いのないと思います。私どもは、リハビリテーションに関連した工学技術を研究・開発する者として、自分の研究・開発したものが果して本当に役立つのだろうか、役に立っているのだろうか、と不安にかられることが時々あります。また、リハビリテーション機器について研究している研究者は「運動機能障害の患者に使い易い皿を開発しても、家庭の中で一人だけ特別なプラスチック製の皿で食事することに寂しさを感じるという理由により、せっかく開発したものを使いたがらない」といった内容のことを書いています。このように、効率や能率の面だけでは解決できないところに、障害者用機器を開発する難しさがあると言えます。大きさに表現すれば、使用者と心が通い、使用者に喜びと生きがいを与えなければ、本当のリハビリテーション機器と言えないのではないのでしょうか。

我が国で私どものような工学関係者がリハビリテーションの領域に関心を持ち積極的な研究・開発活動を始めるようになってから、既に20年近くが経過しました。この間に工学・技術は大変な進歩を見せ、私達の日常生活に多大な恩恵を与えていることは御存じの通りです。そして、リハビリ

テーションの領域においても、これらの進歩を背景としてリハビリテーション工学という新しい分野が確立され、肢体障害や感覚障害などの分野を対象に積極的な研究・開発が行われてきました。これらの研究・開発の結果は、障害者のリハビリテーションに少なからず貢献していますが、今後より一層の発展をめざすためには、いくつかの解決すべき課題が残されています。その中の最大の課題は、先に述べたように、「研究・開発の結果がどれ程リハビリテーションの現場に反映されるか」という点に尽きると思います。

リハビリテーション工学の研究・開発においては、障害者やリハビリテーション現場の要求をいかに正確に把握できるかに、その成否がかかっているといっても過言ではないと思います。そのためには、研究・開発に携わる者自身がリハビリテーションの現場をよく知ることが必要であると共に、障害者自身やリハビリテーションの現場で働くスタッフの協力が必要不可欠です。また、研究・開発の結果を現場に還元する際にも、これらの方々の協力なくしては不可能です。

一方、リハビリテーションの現場や障害者の教育現場においても、新しく開発された機器・システムを利用する場合や、自分で機器に関する種々の工夫を行う場合、訓練や評価に工学的手法を利用した場合などに、工学・技術関係者の協力や機器につ

いての情報提供があれば、より効率的に仕事ができる場面が数多くあると思います。

また、障害者側にとって、新しく開発された機器の情報を得ることは重要なことですが、自分達がどのような機器を必要としているのかを研究・開発を行っている人々に知らせることは、より重要であると言えます。しかし、障害者がこれらの情報を機器開発に反映する機会や、研究・開発を行っている人々と直接話をする場は、これまではほとんどありませんでした。

以上に述べた三者、すなわち、リハビリテーション工学の研究に従事するもの、障害者、リハビリテーションの現場・障害者教育の現場のスタッフとは、本来一致協力して障害者のリハビリテーションの向上をめざすべきであることは明らかです。これまでも、工学関係、医学関係の学会において、リハビリテーション機器・用具等の発表は行われてきましたが、どちらかと言えば理論解析を中心としたアカデミックなものが多く、生活に密着した研究発表・討論の場が無かったのが実情です。

スイッチ・ボタンのちょっとした工夫から、先端技術を応用したシステムまで、現場で役立つ工学・技術に関連した問題を検討し合い、お互いに協力することによって障害者のリハビリテーションの前進を計ることを目的として、昭和61年3月1日に、本協会は設立されました。本協会は、失敗談やちょっとした工夫なども自由に話せる場であり、障害者のリハビリテーションに有効な工学技術・情報に関するネットワークを一緒に作り・利用する場でもあります。また、本協会では、運動機能障害、視覚障害・聴覚障害などの感覚障害、発達遅滞、その他の障害を含む広い意味の障害者のリ

ハビリテーションにおいて利用される工学・技術の問題について、エンジニア、障害者、障害者の家族、リハビリテーションの現場や障害者教育の現場で働くスタッフなどがお互いに理解し得る言葉・方法で話し、一緒に活動することを目的としております。

しかし、これまで別々の立場で活動してきた人々がリハビリテーション工学について共通の場で研究開発の成果を発表し情報交換を行うということは、使用する用語の違いや今までの経過などから種々の問題があります。相手の立場を理解せず自分の立場に固執することは、有効なリハビリテーション工学の研究・開発および実用化のためには、害こそあれ有効な結果をもたらさないことは明白です。

そこで、日本リハビリテーション工学協会では、活動の一環として、会員が相互の立場を理解し情報と意見交換を行うため、協会誌「リハビリテーション・エンジニアリング」を発刊することになりました。内容は、本誌の「原稿募集」の項に詳しく述べており、各立場からのリハビリテーション工学に関する研究発表・意見・関連情報等を掲載していく予定です。

本協会は、以上述べました設立趣旨を十分に生かせるように、自由・自発の精神に基づき、会員相互の努力によって会を支え合うことをモットーとしております。そのため、会則や組織に縛られることを避けるため、会の基盤が確立されるまでは会則、役員を定めず、世話人が雑務を処理しながら体制作りを計っていく予定でおります。多くの分野の方々の積極的な参加とご支援を期待する次第です。